

露呈するエゴイズム——『ゴジラ』（一九五四）を考える

橋本章彦

はじめに

ゴジラの出現によってさまざまなことが露わになっていく。なかでも山根博士の学者的エゴイズム、尾形との恋愛を軸にした恵美子の無邪気さ、そしてそれと連動する芹沢の失恋の三つは、物語の展開においてきわめて重要な軸線を形づくっている。これら三本の軸線は複雑にゴジラと絡みながら、芹沢の犠牲的死による『ゴジラ』の排除^①という悲劇的結末へと収れんしていくのである。本稿では、ゴジラの出現によって三人の登場人物に露わになるエゴイズムに焦点をあてて物語を整理してみたい。

1. 学者的エゴイズム——山根恭平

危うい科学者

山根恭平の姿は、科学者の危うさを体現するものであったことは、多くの評論に触れられておりすでによく知られている。研究に情熱を傾けるあまり、自身の導き出した発見が、いかなる結果をもたら

すかに目をつぶってしまう姿である。研究のおもしろさは、実は発見の喜びにある。それも自分が第一発見者となることが望まれる。宝探しにうつつをぬかす人々が、おうおうにしてまわりのすべてを犠牲にしてしまうように、科学者も研究にとりつかれることで、エゴイストになっていきかねない。山根はそこにおちいった科学者として描かれている。

そうした山根の学者的エゴイズムにかかわる最初のサインは、ゴジラが大戸島に上陸した後の国会でのシーンにあった。オプザーバーとして演台にたった山根は、おもむろに発言をはじめが、ふつと自分のネクタイが背広の外に出てしまっているのに気づく。そして、それをそつと服の中へしまいこむのである。これは、すでに指摘のあるように⁽¹⁾、明らかに後の展開への伏線である。服装の乱れに気付かないままに公式の場にたってしまう姿は、世間的なものに対する無頓着さを示すものであり、研究者としてありがちな態度であった。それが当時の人々の学者に対するイメージであったとあって良いかもしれない。ネクタイをなおすこのシーンは、山根が研究一筋の人間であり、後にゴジラを保護し研究対象にしようとする

張する山根の科学者的エゴイズムに連続していく最初のエピソードとして挿入されたと思われる。

増幅される科学者の危うさ

科学者としての危うさがさらに明確になるのが、大戸島での調査の場面に表れてくる。それは、ゴジラの巨大な足跡の中で、放射線を専門とする田辺博士の忠告にも関わらず夢中になってトリロバイトを探す山根の姿にある。

山根 萩原君。これがある生物の足跡だと言ったら、君信用するかね。

萩原 ほんとですか、先生。

田辺が足跡の中においてガイガーカウンターで放射能を測定する。反応がある。

山根 この足跡には放射能が……。

田辺 みなさん、危険ですから近寄らないで下さい。

さがつて、さがつての声

山根 おっ？、あー、恵美子、ごらん。トリロバイトだ。今は絶滅したと信じられている三葉虫だ。

田辺 先生、直接手に触れない方がいいですよ。

山根 あー

萩原 先生、いったいそれは何です？

山根 これはね、君、大変なものなんだよ。(2)

「大変なもの」を「発見」した山根は、放射能の危険にもかかわらず、なお一心に他に落ちていないか、さがそうとする。発見の興奮に心を奪われ、自らの危険をかえりみない山根の姿態は、研究を何よりも最優先に考える学者のイメージであり、それは人類に不幸をもたらしかねない科学者の危うさをも我々に提示している。そしてこのエピソードは、明らかに先の国会でのネクタイを直す山根の姿に連なるものであった。むしろそこには原水爆をつくった科学者たちへの批判もこめられているだろう。

エゴイズムの暴発

山根のエゴイズムは、その後徐々に具体化していく。

尾形や新吉とともにフリゲート艦隊によるゴジラへの爆雷攻撃のテレビ映像を見ていた山根は、ひとり機嫌をそこねて自室へ閉じこもってしまう。よく知られたシーンで、山根のエゴイズムを論じる際には、引き合いに出されることの多いエピソードのひとつである。ここでは、あまり注目されたことのない新吉の視点から、山根のエゴイズムを捉えてみよう。

新吉は、大戸島へ最初に上陸したゴジラに母と兄を殺されている。

ゴジラが新吉の家を破壊したとき、その下敷きになったのである。新吉は、その事件の後、山根邸に引き取られてその世話になっており、山根がテレビを見ていたときも、尾形と共にその傍らにいた。

山根が、不機嫌に席を立ったとき、新吉にはその理由をはかれなかった。「どうかしたんでしょか」という新吉の問いに尾形は言う。

「先生は動物学者だから、ゴジラを殺したくないんだよ」。その言葉に新吉は、一瞬複雑に当惑した表情を見せて目を伏せる。

新吉にとってゴジラへの爆雷攻撃は、なんら疑問の余地のない当然の対処であった。彼にとっては、ゴジラへの攻撃は復讐にも近い感覚で捉えられていたはずである。のちにゴジラが東京に上陸したあと、戦闘機の攻撃をかわしつつ悠然と東京湾に姿を消していくのを見ていた新吉が「畜生！」と何度も叫びながら泣きじゃくるのは、まさに仇を果たせなかったことによる悔しさからなのであった。彼の被った不幸からして、山根の学者として心のあり方はどうい理解できるものではなかったのである。

一方尾形は、新吉に比べると比較的長く山根との交流があったから、山根の不機嫌の理由がどこにあるかが見えていた。だが、むろん彼は科学者ではなかった。ゴジラは、人々に災難をもたらすがゆえに断じて研究対象ではなく、断固として排除すべき存在だったのである。むろん新吉とは違った意味で。

こうした山根のエゴイズムが、はからずも公式の場で明らかにな

るのは、ゴジラ対策の会議でのことである。これもよく知られたエピソードだが改めて振り返っておこう。

対策本部長 弱ったことになりましたなあー先生

山根 はあ

対策本部長 このままでは近く外国航路も停止しなけりやならん状況です。なにかいい方法が、ヒントだけでも結構です。でなにか一つ……。

山根 そうですな

次官 山根博士、率直に申し上げます。いかにしたらゴジラの生命を絶つことができるのか、その対策を伺いたいです。

山根は語気を荒げて

山根 それは無理です。水爆の洗礼を受けながらもなおかつ生命を保っているゴジラをなにもって抹殺しようというのですか。そんなことよりも、まずあの不思議な生命力を研究することこそ第一の急務です。

次官の言葉に誘われるようにして山根の本音が吐露されている。科学者なれば、つねに不可能と思われるような難問にも挑んでいくのが責務のはずである。そうして人類は進歩してきたのである。し

かし、彼は科学者としてのエゴイズムを優先させた。

彼が、科学者としての個人的名誉にも思いをよせていたことは、その後の山根邸での尾形との議論に表れている。

ある晩、山根邸を訪れていた尾形は、恵美子との関係を山根に打ち明けよう決心していた。しかし、そのとき帰宅した山根が、最初に口にしたのがゴジラ対策への批判であった。

山根　ゴジラを殺すことばかり考えて、なぜ物理衛生学の立場から研究しようとしらないんだ。このまたとない機会を。

尾形　先生。僕は反対です。

山根　尾形君。わしは気まぐれに言っているのではないよ。あのゴジラは、世界中の学者が誰一人としてみていない、日本だけに現れた貴重な研究資料だ。

尾形　しかし先生。だからと言ってあの凶暴な怪物をあのままほっておくわけにはいきません。ゴジラこそ我々日本人の上に今の覆いかぶさっている水爆そのものではありませんか。

山根　その水爆の洗礼を受けながらなおかつ生きている生命の秘密をなぜ解こうとしないんだ。

尾形　しかし……。

山根　君までもがゴジラを抹殺しようというのか。帰り給え、

帰ってくれ給え。

と声を荒げて不機嫌に席を立つ山根の姿には、尾形の意見にも一理があることを十分に理解しつつも、一方で「世界中の学者が誰一人としてみていない、日本だけに現れた貴重な研究資料」を失いたくないという科学者としての焦りにも似た気持ちがあり、その二つの間で板挟みになることからくる苛立ちが見てとれる。山根の科学者としてのエゴイズムが暴発した瞬間であった。山根は、明らかにゴジラを研究材料に世界の「先駆者」となることへの期待があった。多くの評論が指摘するように、ここに科学者のエゴイズムがもつともよく現れているというべきであろう。こうして最初の国会における「ネクタイ」のエピソードが完結したことになる。

ゴジラがこなければ、山根はここまで露骨にエゴイストにはならなかったかもしれない。ゴジラは、科学者山根が持っていた危うさを白日の下に露わし出したのである。

ところで、右のシーンの直後に、ゴジラが東京に本格的に上陸し街や人を蹂躪していくことになる。そうした展開のあり方には、科学と科学者のもつ危険性についての何らかのメッセージが込められている可能性をみておいても良いかもしれない。なぜならば、映画とはそのような緻密な計算の上に構成されるからである。

一方で山根の愛弟子である芹沢は、一貫して科学者の良心という

ものを大切にする人物として描かれている。山根とは対照的な位置におかれているのである。彼は、自分の研究が新たな大量破壊兵器につながっていかないよう自ら死を選んでいく崇高な人物であった。ただ、次節で述べるようにそこにはそれだけではない複雑な問題も横たわってはいる。しかし、少なくとも山根のように科学者の持つ危うさは芹沢には表されていない。科学者のあるべき姿の理想像が彼によって表現されていると見るべきかもしれない。

山根はゴジラの東京上陸の後、あらたに設置された対策研究班の長になる。だがその後の彼は、尾形と恵美子そして芹沢の物語軸へ埋没し中心からはずれていく。山根が最初に登場する「ネクタイ」の場面から科学的なエゴイズムを暴発させるエピソードまでが、物語における彼の意義であったことをこの事実は示しているようにある。その後、尾形、恵美子、芹沢彼らによって物語は主導されていき、対策班長としての山根の責務は、彼の娘と愛弟子によって果たされていくことになる。

エゴイズムの変容―白神彦郎と桐島一人

じつは、山根と芹沢の対立構造とほとんど同じ構図が『ゴジラVS Bioランテ』（大森一樹監督、一九八九年）にも引き継がれている。この映画では、主要な科学者として二人の人物が登場する。白神源彦郎と桐島一人である。

白神は、仮想の産油国のオイルダラーで砂漠を緑にする研究を行っていた。だが、それには前作『ゴジラ』（一九八四年）でゴジラが偶然にも建物に付着させていたゴジラ細胞がかかわっていた。この細胞は、永遠の命を生み出すものであった。しかし、同時に抗核バクテリアという核兵器を無力化する微生物を産み出す可能性をも秘めていたのである。そのためアメリカのテロ攻撃により研究室を爆破され、白神は最愛の娘を死なせてしまう。娘を失った白神は、彼女の愛したバラにその細胞を融合させる。白神にとっては、娘に植物としての新たな命を与えたが、それは、人間と植物の細胞を合わせるといふ悪魔的な所行にでたことになる。これは科学者として越えてはならない一線を越えてしまったといえるだろう。そのバラが、地震によるハウスの倒壊によって死滅の危機に瀕することになる。

それより以前、白神は、ゴジラ対策のための抗核バクテリア製造に携わるように政府から依頼を受けていた。はじめはそれをかたくなに拒んでいた白神であったが、バラに永遠の命を与えるためにはどうしてもゴジラ細胞を手に入れる必要があり、細胞を一週間のあいだ白神の研究室に貸し出すことを条件にバクテリア製造を許諾する。白神は、貸し出された一週間のあいだにバラ（娘）とゴジラ細胞を融合させ、バラに永遠の命を与えることに成功する。しかし、白神も予期しないことであったが、これがのちにBioランテを産み

出すことになってしまうのである。

一方、桐島一人は筑波生命工学研究所のエリート研究員である。抗核バクテリアの製造には、一貫して懐疑的であった。それは、やがて核兵器を無力化する兵器を産み出すことにつながり、核が最終兵器ではなくなってしまうことへの危惧からであった。人類は、さらに威力のある兵器をつくりだしてしまう可能性があった。しかし、ゴジラを倒すためには、考え得る唯一の手段であることから、結局抗核バクテリアの製造に携わることになる。

彼は白神の科学者としての能力は認めつつも、彼の考えや行為にはきわめて批判的であり、ピオランテが、人とバラ、そしてゴジラ細胞の融合の結果出現したものであることを知ったとき、白神に徹底した侮蔑のまなざしを向け、白神とは対照的に良心ある科学者として描かれている。

政争のために最愛の娘を失った白神は、ペシミズムに陥っていた。ゴジラ対策のため抗核バクテリア製造の依頼に来た黒木特佐と権藤一佐に

白神 わたしはもう二度とゴジラ細胞に手をつけるつもりはありません。

黒木 気持ちわかりますが博士、これは日本という国をゴジラから守るための

白神 私は国よりも大切な娘をゴジラ細胞のために失ったんです。わたしにもう守るべきものではありません。

とかたくなに拒否する態度には、一人の親としてのエゴイズムの噴出を見ることができる。山根の場合は、多少なりとも科学者の社会的使命を感じさせた。たとえば、先にも問題にしたが、政府の役人からゴジラを抹殺する方法を問われた山根は、「水爆の洗礼を受けながらもなおかつ生命を保っているゴジラをなにももって抹殺しようというのですか。そんなことよりも、まずあの不思議な生命力を研究することこそ第一の急務です」と言いはなっているが、その背景には、科学者の使命のようなものが横たわっている。それは「不思議な生命力」の謎の解明が。人類に何らか貢献するはずだといった確信のようなものがあるのだろう。それは映画制作者の科学者観であった。そのことは、芹沢博士のオキシジェンデストロイヤーに対する「僕は必ずこのオキシジェン・デストロイヤーを社会のために役立つようにして見せます」といった発言にも見て取ることができ。科学者は、人類の役に立つものを見付け、あるいは創り出さなければならない使命を負っている、というわけである。

しかしながら、白神にはそれはない。これは、守るべきものが、国ではなく家族となった時代の感覚である。志をもって仕事に携わっていた時代と「個」を最優先させる時代の差がここにあるよう

に思われる⁽³⁾。

白神には、山根同様に科学者のもっている危うさが表現されている。だが、それが個人的なエゴイズムに起因するところが山根よりも反社会的であった。

2. 愛される者と拒否される者

—— 恵美子と芹沢

恋と愛そして愛される側の残酷

恋をすれば、誰しも相手のことをもつと知りたいたいと願うことになる。だからできるだけその人と一緒にいたいという感情を呼び起こすのである。恋の延長線上に愛がある。しかし愛は相手を生かさうとする感情だ。相手が喜ぶことをしたい、やや極論めいたな言い方をすれば、そのためには自分の犠牲もいとわないといった感情である。いうならば、恋は利己的な性格を残しているのだが、愛は利他的な行為であると言えよう。恋は愛に連なっていくわけであるから、恋でも愛でも相手と一緒にいたいという想いにかわりはなく、ときにはきわめて強い感情として現れる。愛の場合は、相手を全面的に受け入れその幸せのために働こうとするのであるから、恋の場合よりも相手への想いは強いといってもよいであろう。しかし恋にしる愛にしる、当たり前のことだが、相手が受け入れてくれることが前

提である。相手に拒否されたときすべてが破綻する。相手が受け入れるかどうかについては、論理ではなくそれを越えた人間的で不合理な何かが二人の間に作用することも多い。

問題なのは、恋なり愛なりが一方的な場合だ。一昔前ならば「男女七歳にして席を同じうせず」であったが、現在では男女が気軽に友人関係を結びあえる環境にある。そのような状況の中で友人のつもりが、いつしか相手に対する恋心や愛の感情を持ってしまうこともあるだろう。そこで、いわゆる「告白」という儀式が必要になるわけだが、相手に拒否される場合、相手の常套的言葉として「これからもよき友人としていきましょう」と言うことがある。この言葉は、相手が最初から自分を恋愛対象にはしていなかったことを示すものだが、しかしより問題なのは、その後も縁を切ることもできず相手を目の前にしながら、どうすることもできない状態におかれることである。「愛する側」にとつてこれほど苦痛で残酷なことではない。少なくとも失恋の当初はそうである。

愛される側は、愛されるという点で余裕が生まれる。たとえ拒否したい相手であっても、愛を告白されれば、その瞬間は、だれしもが多少なりともうれいものだ。それが、愛される側の余裕となる。多くの場合愛される側は、その余裕のために愛する側の苦しみに真に思いをいたすことはない。そのことがときに相手への残酷さをうみだすことにつながることもある。

恵美子は、ゴジラの出現によって、無意識のうちに芹沢に対して「愛される側の残酷さ」を露わにした。しかもそのことは彼女の「無邪気さ」によって増幅され、皮肉にもそれがゴジラを葬ることにつながった。本節の主張を結論から言えば、そのようになるだろうか。

実は、悪女としての恵美子を指摘することは、筆者がはじめてではない。ウェブ上に、いくつかを管見に入れることができる⁴。ただし、それらにおいては、確信犯的に恵美子の悪を論ずる方向性があり、それには多少の違和感を感じざるをえない。おそらく恵美子の悪は、自らの行為の重大さに気が付かない「無邪気さ」ゆえのことであったとみるべきだと思われる。以下そのような立場から物語の展開を追ってみよう。

恵美子の気持ち

恵美子は、山根の娘である。一方芹沢は、山根の愛弟子であり、いつのころからかはわからないが、恵美子の許嫁として予定されていた人物である。彼は、戦争で傷を負い右目に眼帯をつけている。また尾形は、芹沢ともともと近い関係にあったようだ。

実は、尾形はこの映画の主人公ではあるが、恵美子・尾形・芹沢の軸線においては恵美子との恋愛関係を媒介にしてある種の狂言回しの役割を担っているに過ぎない。恵美子と連動してその思いを現実のものとしていくのである。

恵美子と尾形がいつから恋愛関係になったかはわからない。しかし、少なくとも芹沢が許嫁になった後であるらしい。それは二人が、その関係を山根に打ち明けるかどうかを相談する場面での会話に現れている。恵美子の「お父さまだつてきつと許してくださるわ」という言葉は、尾形との関係が、父・山根にはばかれるものであったことを示しており、それは芹沢が彼女の許嫁となったあとに尾形との関係が生じたことに起因するようだ。

このとき尾形は「誰にも遠慮することはないとは思いながら、芹沢さんのことを考えるとどうも弱気になる。戦争さえなかったら、あんなひどい傷を受けずにすんだはずなのに」と答える。尾形の芹沢への遠慮は、芹沢の顔の傷のため、許嫁であった恵美子の心に多少なりとも動揺が生じ、それに乗じて自分が恵美子を奪ったのではないか、と考えることからくるものである。

だが恵美子の思いは違った。尾形の言葉に「尾形さん。あの方には、子供の頃からお兄さまのように甘えたりしていて、いまだって私その頃の気持ちとちつとも変わりませんのよ」という。つまり、尾形が考えるように、戦争で受けた傷が問題ではなかったというわけだ。そして、より重要なのは、芹沢と恵美子の愛は、はじめから成りたつていなかったという点にある。

芹沢の行動

芹沢が、恵美子の心が自分ないことを最初に知るの、大戸島調査団の出航のシーンである。見送りに来ていた芹沢は、船の上にいる尾形と恵美子を見たとき、彼らの関係を直感する。だが芹沢は、彼女の心を取り戻すために露骨な手段はとらなかつた。しかし、そのチャンスは、思わぬところからやってくる。恵美子が新聞記者萩原を連れて芹沢に会いにきたのである。記者は、芹沢の研究がゴジラ対策の切り札になるかもしれないとの情報を得て、それを確かめに来たのであった。むろん、芹沢はそれを認めない。そして記者が帰って芹沢と恵美子が二人きりになったときのことである。

恵美子　ねえー　ほんとうに今なにを研究してらっしゃるの？

お父さまもおっしゃってたわ。芹沢は、このごろなにをやっているんだろって。

芹沢　恵美子さん。見せてあげようか。

恵美子　えっ？　ええ。

芹沢　その代わり、絶対に秘密ですよ。

恵美子　ええ。

芹沢　僕の命がけの研究なんだ。念をおすが誓ってくれね。

恵美子は、その言葉にはっきりとうなずく。

芹沢に実験を見せようと言われたときの恵美子の表情は、ある種

の驚きと戸惑いを表していた。恵美子にとってそれは意外なことだったのである。このあと実験室で、オキシジェン・デストロイヤーの威力を見せられることになる。そして芹沢は言う。「恵美子さん！あなただから見せたんだ。それを忘れないで！」。芹沢は、彼女の心を取り戻すために「秘密の共有」⁽⁵⁾ という手段を使ったことになる。二人の間で秘密を共有することは、絆を強める有効な方法のひとつである。その内容が、重要であればあるほどこちら側の気持ちの強さを表すことにもなる。じつは、このとき恵美子は、尾形との関係を芹沢に告白するつもりで来ていたのである。芹沢がそれを察知していたかどうかはわからないが、結果的にそのことは沙汰止みとなった。

映画を見る観客にはのちに知らされることになるが、このとき芹沢は重大な決意を恵美子に告げていた。

恵美子　だけど、もしもよ、もしも、それが恐ろしい目的に使

用されたとしたら。

芹沢　そうです。もしも兵器として使用されたとしたなら、そ

れこそ水爆と同じように人類を破滅に導くかもしれません。しかし、僕は必ずこのオキシジェン・デストロイヤーを社会のために役立つようにして見せます。それまでは

絶対に発表しません。だからさっきの新聞社の人にも

断ったんです。もしもこのまま何らかの形で使用するこ
とを強制されたとしたら、僕は僕の死とともにこの研究
を消滅させてしまう決心なんです。

恵美子 わかりました。わたくしどんなことがあっても、お父
さまにだって絶対には申しませんわ。

恵美子の残酷

だが、恵美子は、芹沢のそんな決意を知らながら、この秘密をこ
とにあらうか尾形に漏らしてしまう。それは、ゴジラ東京上陸のあ
との惨状を見かねてのことであつたため、やむを得ずという印象が
映画を見る側には生まれる。しかし、考えてみれば、恵美子は芹沢
の命がけの決意を知っていたはずだ。にもかかわらず芹沢にまず相
談せず尾形に告白するとは、いったいどういうことであろうか。こ
れは、芹沢にとつては大変な裏切り行為である。

そのことは、恵美子も理解していた。しかし、ゴジラによる人的
被害の惨状を見かねて「喜んで裏切り者」⁽⁶⁾ になつたのである。
その時の恵美子が確信的に芹沢を死に追いやるうとしていたかど
うかについてはにはわかには断定できない。なぜならば、彼女には、
人の気持ちを思いやりそれに応じて行動するといった性格設定がな
されていらないように思われるからである。

たとえば、先にも触れたが、フリゲート艦隊によるゴジラへの爆

雷攻撃を見ていた山根が不機嫌に席を立つ場面で、傍らにいた恵美
子が父の行為を心配して「執拗」に後を追っていく場面がある。山
根は、暗い部屋で一人考えたかつたのだが、恵美子の行為は、そん
な山根の心をまったく察していないことを示しているだろう。

また彼女が、父が「籠もつた」自室のドアを開けて、消してある
電燈をわざわざ点けたり、あるいは「しばらく一人にしておいてく
れ」という父の言葉にしたがつて部屋を出ようとしたとき、明かり
を点けたままにして出ようとするなど、決して父の複雑な気持ちに
思いをいたしているとは思えない行動が目立つ。恵美子は、山根の
「電気を消していってくれ」ということばではじめてスイッチを切
るのである。

こうした恵美子の姿には、決して賢明とはいえない人物という性
格設定が隠されていると見て取ることができよう。恵美子の
性格造形には、ある種子供のような「無邪気さ」が付与されている
のである⁽⁷⁾。

それは、調査団の一員として大戸島に向かう船上での尾形との次
のシーンの中にも指摘することができる。

尾形

芹沢さんが見送りに来るなんてよほどのことだな。めつ
たに実験室から出たことのない人が、最後のお別れに来
たつもりかもしれない。

恵美子 まあ、どうして？

尾形 もちろん危険水域は避けていくが、万一でこともあるからね。

そのあと、恵美子は船の上から、不安な面持ちで海底を見据えるように覗くシーンが映し出される。

これは、明らかに恵美子が乗船に際して、途中でゴジラに襲われる危険性に思いをいたしていなかったことを示している。やはり無邪気な恵美子の性格が表れているというべきであろう。

ところで、恵美子の話を聞いた尾形は、もともと直情径行型の人間であるから、あまり深く考えることもなく、すぐさま、オキシジェン・デストロイヤーの使用を説得するため恵美子と共に芹沢の実験室に向かうことになる。

恵美子の裏切りを知った芹沢は、その場で自暴自棄になり研究資料を焼き捨てようとする。これは、自分の研究が自身の思いとは違った形で世に出るかもしれないという悔しさからくる行為と言うよりは、愛する恵美子の背信行為による絶望からくるものであった。そのとき芹沢を止めようとした尾形ともみ合った際、あやまって尾形を傷つけてしまう。それを介抱する恵美子の姿をみて、芹沢は、自分の失恋がもはや決定的であることを知るのである。

この恵美子の裏切り行為には、彼女の「愛される者の残酷さ」を

読み取らねばならないだろう。この段階でオキシジェン・デストロイヤーを使用することは、たしかにゴジラ対策には有効であるかもしれない。しかし、同時にそれは芹沢を死に追いやる可能性を持っていた。そしてそのことは誰よりも恵美子自身がよく知っていたはずである。状況は切迫してはいたが、少なくとも恵美子の行為には、「兄のような存在」という芹沢への思いやりは希薄である。

芹沢が、オキシジェン・デストロイヤーの使用を決意するのは、直接にはテレビに映し出された被害の惨状と鎮魂の歌をうたう少女達の姿であった。おそらく人は論理よりも感情によって動かされやすい存在なのである。芹沢は言う。

尾形 君たちの勝利だ。しかし、僕の手でオキシジェン・デストロイヤーを使用するのは今回一回限りだ。

すでに指摘があるように、この「君たちの勝利」という言葉には、二重の意味が込められているだろう⁽⁸⁾。一つは、二人の説得に負けて使用を許諾したこと、もう一つは、恵美子をめぐる恋愛に敗北したことである。そうして彼は死を決意するのだが、それは兵器の拡散を防ぐという崇高な行為のためだけでなく、恵美子への愛が破綻したことも大きな要因であった。恵美子が尾形にオキシジェン・デストロイヤーの秘密を漏らすということは、芹沢からすれば、恵

美子に死を選択せよといわれたに等しいことだった。そこまで恵美子の心は芹沢にはむいていなかったのである。その絶望も彼の死の決意に影響を与えていたであろう。

芹沢は、オキシジェン・デストロイヤーの使用を決断した後、長年の研究成果を焼き捨てる。それを見た恵美子は、その場に泣き崩れた。だが、その涙は、芹沢の努力を自分の裏切り行為によって無にしてしまったことへの悲しみである。芹沢を死に追いやるかもしれないことへの悲しみではない。芹沢は静かに言う。

いいんだよ。恵美子さん。これだけは絶対に悪魔の手に渡してはならない設計図なんだ。

我々は、この言葉の表面だけを受け取ってはいけない。その裏側には恵美子への絶望が隠されていることを忘れてはならない。

尾形とともにオキシジェン・デストロイヤーをもってゴジラのいる海に潜っていくこうとする芹沢に、恵美子は「ご成功をお祈りしますわ」と声をかける。しかし、これは芹沢にとってきわめて残酷な言葉である。その成功は、自分の死と一体だからである。事実、芹沢はそのとき一瞬複雑な表情を見せる。恵美子の無邪気さはすでに無慈悲のレベルにまで達していると言わざるをえない。こうしてオキシジェン・デストロイヤーは使用され、ゴジラは芹沢と共に海中

に葬られていった。

芹沢の研究成果は、恵美子を媒介項にしてゴジラと結びつきその生命を断ちきることにつながっていった。その契機は恵美子の裏切りであり、それは彼女の「無邪気」によって増幅された「愛される側の残酷」を基底に持つものであったといえるであろう。

注

(1) 藪野直史「メタファーとしてのゴジラ」(<http://homepage2nifty.com/onibi/godhurl>) 2009年4月11日閲覧

(2) 本稿に引用する台詞は、『東宝特撮映画DVDコレクション』第1号付録、デアゴステイーニ・ジャパン、2009年10月のDVDによる。

(3) 1999年8月30日に発売されたトヨタ自動車の「ファンカーゴ」のCMでの「どこで何しても私たちのかってでしょー」というフレーズは、この時代のある側面を象徴的に表しているように思える。また小林よしのりの『戦争論』が発刊されたのが、1998年6月のことであり、これにより「公・私」論争がマスコミをにぎわしたことは記憶に新しい。90年代は、個性の尊重の結果、個が暴走傾向にあった時代であった。それにどめをかけるためには宗教が重要であったが、宗教はある種の破滅的状况にあり、その傾向は今も同じである。

(4) たとえば、倉田わたる「ゴジラの秘密」(<http://www.kurata-wataru>).

com/godzilla.html 1995年7月13日)、あるいはそれを受けた「げに恐ろしきは女。汝の名は恵美子(ゴジラ)」(<http://areed.seesaa.net/article/1447250.html> 2006年3月9日)など。

(5) 前掲(4)「げに恐ろしきは女。汝の名は恵美子(ゴジラ)」。また藪野直史は、(前掲(1))で恵美子への秘密の暴露を彼女への「命がけの愛」の表明ととらえている。ただし、藪野は、ほかに戦後における価値観のコペルニクスの転回のみならず、芹沢のレゾン・デートルの確認に恵美子への愛をからませる理解も提示している。

(6) 物語中で、ゴジラの人的被害を目の当たりにした恵美子が尾形に芹沢との秘密を打ち明けたときの台詞「もう黙ってみてはいられません。わたくしは喜んで裏切り者になります」による。その時の尾形の硬い表情での台詞「芹沢さん!？」は、三角関係を考慮すれば興味深い場面である。

(7) 前掲(3)の「げに恐ろしきは女。汝の名は恵美子(ゴジラ)」も彼女の無邪気さに注目している。

(8) 前掲(1) 藪野「メタファーとしてのゴジラ」